



神

神聖かまってちゃんと武井荘

考えすぎる知恵ちゃん

剣の達人である宮本武蔵は五輪書に「無念無相の打」が重要だとかいている。

敵と殺し合いをする場合、お互いが同時に打ちかかろうとするときどこで勝敗がわかるかという、いかに自然に身体が動くかであり、敵を打つさい身体が無駄に力まず自然に動くことが無念無相の打だという。

たとえば、武井荘の運動理論↓

たとえば、武井荘の運動理論もそれに近い。武井は特定のスポーツの練習をしないそうだ。自分の頭でイメージした通りに身体を動かすことを普段からしているという。↓



イメージは重要である。

イメージは重要である。

ロックンロールはとくにそうだ。「わたしは何者かになれる！なるはずなんだ！」という自意識がだいじなのだ。

たとえば、チャットモンチーの橋本絵莉子は「自分はプロになるだろう」という根拠無い自信があったという。この根拠のない自信がだいじなのだ。すべてはイメージの大きさである。根拠のある地に足のついた程度の自信は大きさとスケールからしてたかがしれている。もっと真っ暗闇のなかで手を必死でかきわけた先に光があるからだ。というようなことを甲本ヒロトがいていたような気がする。



イメージを使えば人は何かになれる。



イメージを使えば人は何かになれる。

たとえば、「自分はモテるんだ」と思っていると本当にモテるようになるという逸話がある。五体不満足がベストセラーになっていまや面白おじさんとして絶賛活躍中の乙武洋匡は著書のなかであることをかいていた。

それは、障害者である自分が「自分はモテないんだ」と暗くなっている場合と、無理にでも普段から明るく振舞っている場合とでは、どちらが人にモテるだろうかと考えると後者であるという。

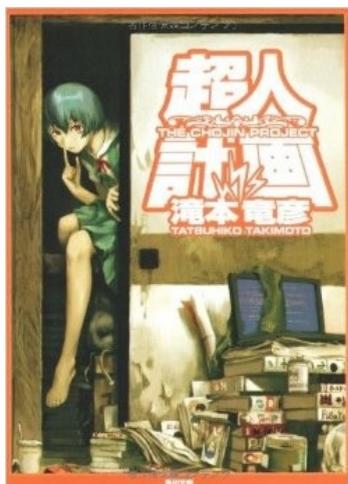
障害があるという普通の人と比べてハンデ（ここではあえてこの言い方）をもっているなか、そこで暗く振舞っている人間と明るく振舞っている人間どちらがモテるか、という話である。

これは障害あるなしに関わらず共通する真理だ。

というか、人間なんてみんなかならずどこかが壊れているのだから、それならば明るくいた方が卑屈で暗い人間と圧倒的な差をそこでかんたんにつけることができるということだ。

↓

しかし、卑屈になることは正解である。



しかし、卑屈になることは正解である。

モテから遠ざかることはひとつ確かなではなるが、何かを成す人間というのは、どこか卑屈でいる人間ではないだろうか。卑屈でいるということは、何かキミにとって許せないことがあるからだろう。それを言葉で行動で主張しているんだろう？



まったく間違っていない。よく大人は「いやー若いなー。そう思ってた時期あったよわたしも」と上から目線で説教をたれてくるがノーセンキューだ。聞く必要はない。

坂口安吾は↓

坂口安吾は先人の上から目線の助言について
こう語っている。



「ほんとうのことというものは、ほんとうすぎるから、わたしはきらいだ。死ねば白骨になるという。死んでしまえばそれまでだという。こういうあたりまえすぎることは、無意味であるにすぎないのだ。教訓には二つあって、先人がそのために失敗したから後人はそれをしてはならぬ、という意味のものと、先人はそのために失敗し後人も失敗するにきまっているが、さればとって、だからするなどはいえない性質のものと、二つである」

↓

まったくその通りだろう。

たとえば、「処女こそ良いんだよ」「童貞こそ良いんだよ」といくらリビドーの力を先人から説かれようが、やりたいものはやりたいだろう。偉そうにそう説教する人間は処女童貞じゃなくなったから、そう云っているわけで、経験していないときからそのように悟りきっていたのかは疑わしい。



坂口安吾はこう続けている。↓

坂口安吾はこう続けている。

「人の魂は何物によっても満たし得ないものである。とくに知識は人を悪魔につなぐ糸であり、人生に永遠なるもの、裏切らざる幸福などはもとより嘘にきまっけていて、永遠の恋などと詩人めかしていうのも、単にある主観的イメージをもつてあそぶ言葉の綾だが、こういう詩的陶醉は決して優美高尚なものでもないのである」

↓

さらに、この後は百人一首をディスっている。

百人一首はすべて恋の歌だ。坂口安吾はその恋の歌は動物が普段から鳴いているものを人間が言葉に訳した程度のもので、とくべつ高尚なものではないじゃん、過大評価されてる、たいしておもしろくねえよ、と云っている。

この雑誌を手にとってここを読んでいる我々にとってひじょうに共感できる話だ。

それは、恋愛なんてくそくらえ、わたしたちはもっと切実なことで悩んでいるんだよ！という気持ちでいるからだ。

そこで、神聖かまってちゃんである。

↓

そこで、神聖かまってちゃんである。

かれらは、疎外された者の歌を歌う。たとえば、知恵ちゃんの聖書という楽曲の歌詞はこうである。

《 雨の中で／泣いてるはぶられた／
「あー、まじすか」、とため息を／
漏らす女の子／ほら、

知恵ちゃん勇気だよ 》

↓

登場人物は周りから疎外されている。「あーまじすか」と云っていることから、知恵ちゃんという女の子は自分の状況をふかんして見ていることがわかる。

ふかんは絶望の果ての行為だ。人間は本来なら自分に不幸があれば嘆く。それをしないということは、不幸が起こり嘆き続けることに精神が耐えられなくなったことを意味する。限界に達した精神は逃げ場所を求めて自分自身に客観的な感性を与えるのだ。受け止めきれなくなった現実からの逃避である。しかし、必要な逃避だ。

歌詞はさらにこう続く。



《 頭いいからね／知恵ちゃんは／
考えすぎてしまうんだ
それでもね／優しいね
天使のような人目指して
みんなから嫌われて
傷つくもんだと思います
優しさをあげれるような
優しい人でいなさいな 》

↓

神聖かまってちゃんの楽曲のすべてを作詞作曲しているのはの子だ。

の子はこの曲で云っている。疎外されるキミはそのままのキミでいていいし、キミだからこそ人の気持ちが分かるから人に優しくできる素質をもっているんだぜ、と。

それは歌詞にあるように、天使のような人を目指していくことが重要だ。全知全能の良い人間になるのではなく、そのような崇高な精神をドブに捨てないで自分を持ち続けていこうということである。

ここでイメージの力が重要になってくるのだ。

↓

ここでイメージの力が重要になってくるのだ。

童話『小公女セーラ』という作品がある。金持ちの生まれのセーラはあることで親と離れて貧乏のどん底になってしまう。自分は心までは貧しくならないと気高い精神をもっていたためセーラは辛い状況でも気を保っていた。自分はプリンセスなんだというイメージの力をつかっていた。しかし、腹ペコで働きづめになっていたとき、セーラはあることをキッカケに「私は優しいプリンセスよ」という気高くあろうとした精神に自分でウンザリする場面がある。

つまり、不幸に飲み込まれないセーラはイメージの力でその気高い精神を保っていたし、同時にどんなにイメージの力があってもそれが崩れてしまう瞬間があるということを『小公女セーラ』は教えてくれる。

セーラだって、自分の気高い精神をたもつイメージごっこにあるときウンザリしていたんだから、わたしが自分自身にウンザリしていたっていいのだ。

小公女

パーネット作

吉田勝江訳



ただ、セーラのようにの子の楽曲『知恵ちゃんの聖書』の一節「天使のように」のように、崇高な精神であろうという志はわすれてはいけない。それによってわたしたちは疎外された者にいち早く気づき手当することが可能だ。わたしたちにしかできない。やつらには決してできない。

それを神聖かまってちゃんは教えてくれる。

わたしたちのイメージこそ、世界を変える。←

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ